

# マンガと宗教の現在

## 『20世紀少年』と二一世紀の宗教意識

現代日本における宗教・宗教意識は多様化しつつある。

社会の様々な変化（都市化、グローバル化など）に伴い、世俗化や諸宗教の構造変化などが進む中で、宗教団体以外にも宗教らしいものが見出されるようになった。特に、一九七〇年代以降、宗教の相対化が進む中で、娯楽メディアを通して宗教情報の消費が増加している。<sup>(1)</sup> テレビ、雑誌、映画などに「宗教的な」（あるいはオカルト的な）テーマがよく登場するようになった。これらのメディアを通して、現代人の宗教情報への関心の高さがうかがえる。<sup>(2)</sup>

しかし、同時に社会においては——特にオウム真理教が起こした一連の事件（以下、オウム事件）以降——宗

## ジヨリオン・バラカ・トーマス

教に対する懐疑や嫌悪なども強い。よって、現代日本の宗教イメージは「宗教」たるものの色彩を薄め、そのエンターテインメント性に集中する傾向がある。一方、今の日本では、本来の「宗教」というキーワードの代わりに、「伝統」「慣習」「常識」「見えない世界」などの婉曲的な単語が人々の間で日常的に使われている。<sup>(3)</sup> 要するに、人々には「宗教」に対する不信感があるにも関わらず、大衆メディアには宗教情報への関心や宗教思想が度々現れ、しかもそこには変遷が見られる。

## 娯楽と宗教の融合・併存

今回のテーマ「メディアが生み出す神々」を考える際、

大衆メディアの影響力やその情報のユビキタス性を見落としてはならないと筆者は考える。現代人は未曾有の膨大な情報に飲み込まれ、日常生活において宗教的な情報に接することも多い。しかし、その情報はかならずしも宗教伝統・団体やその教義に忠実であるとは限らない。メディア作者は恣意的に宗教的な語彙や概念を用い、エンターテインメント性を高めるためにそれらを作品に編み込む。また逆に、その成功に倣い、宗教団体自身が信者や一般人を教化・誘導するため、メディアを通してその教義を宣伝する。宗教はメディアを利用するだけではなく、メディアに使用され且つ変質させられる。<sup>(4)</sup>

この宗教と娯楽の結びつき（換言すれば、宗教の代替物としての娯楽、あるいは宗教≒娯楽）の好例の一つとして（アニメを含めて）現代マンガ文化を取り上げることができ。他の大衆メディアと同様に、マンガ文化における宗教情報は必ずしも正式な教義ではないかも知れない。しかし、だからといって、その影響力は無視出来ない。メディアを通して、一般人の宗教イメージはある程度形成されていると思われるからである。<sup>(5)</sup>

情報媒体として、従来、マンガは学界で軽視されがちであったが、実際には社会で広く読まれており、その影響力は極めて強い。<sup>(6)</sup> 例えば、一九九五年度に日本で刊行された出版物全体の四割がマンガだった、というデータもある。回し読みやマンガ喫茶店の営業などを視野に入れると、マンガの重要性を容易に理解できるだろう。<sup>(7)</sup> しかし、いまだにやや保守的・批判的な立場からマンガを見る知識人は存在しており、彼らは軽蔑的に「大衆文化にすぎない」と断言して無視する。<sup>(8)</sup> もしくは、マンガの危険性のみを主張する傾向がある（たとえば、宮崎勤の連続殺人事件やオウム事件をオタク・マンガと結びつける風潮など）。<sup>(9)</sup> 他方、一般人にとつてのマンガは虚構であり、現実逃避的な遊びに過ぎないという見方もある。これらの理解はいずれも極端で、特定の側面のみがクローズアップされていると考える。現在、マンガは人々に大きな影響を与え続けている有力なメディアであり、学術的な検討を必要とする対象であることに疑問の余地はない。

さらに、前述したように一部のマンガやアニメには宗教的な要素が反映されており、そこからは社会における

宗教情勢を理解することができる。その手がかりとして、マンガに表現された理想・倫理・生き方などの側面を探る必要があると筆者は考える。しかし、宗教学という分野を見渡すと、幾つかの例外があるものの、明らかにマンガ文化は間接的にしか言及されていない。積極的に宗教とマンガ・アニメの関係を認める研究の中でも、「宗教」の捉え方を明確化しないまま論を進めるものが多い。また、ある研究はマンガ・アニメにおける宗教的なテーマを見出そうとしているが、漫画家やアニメ監督の意図や読み手の受け入れを視野に入れない限り、当事者にとってその内容が神道、仏教、キリスト教であるとは断言できないだろう。場合によっては、単純な遊びに過ぎないかも知れない。しかし、その制作プロセスと受け入れ状況、またはその物語の構造と表現法を徹底的にみることで、マンガ文化の宗教性を把握出来ると筆者は考える。少なくとも、特定のマンガがどのように同時代状況を反映しているかを検討することで、当時の宗教意識を——間接的にはあるが——理解できるのではないかと思われる。

本稿では、現代のマンガ・アニメ作品の宗教性について考察するため、一つのケース・スタディーを行いたい。ここでは、二〇〇七年に漸く八年間の連載が終わった、浦沢直樹の作品『20世紀少年』<sup>(15)</sup>を中心に、近年描かれた幾つかの「カルト問題」を取り扱ったマンガを取り上げる。本稿では、これら一連の議論を念頭に置いて、オウム事件を節目として現代人の宗教意識と宗教に関する態度について論じる。

#### ケース・スタディー

いわゆる「カルト問題」と現代

オウム真理教が東京の地下鉄でサリンガスをばら撒いて以来、すでに十余年の月日が経過したが、宗教団体はもちろん、宗教学や一般社会においてもその反響はいまだに続いている。<sup>(16)</sup> オウムのような宗教団体は再び社会に危機をもたらすか、そこで法律的にどの程度宗教集団を監視・制御するかという一連の問題がいまだに完全に解決されていない。一九九〇年代半ばには既に、葬式仏教や国家神道、創価学会の折伏運動などに代表される、墮

落した宗教、怪しい宗教という懷疑は一般市民の間に存在していたが、オウム以降そういった宗教に対する危機感<sup>(17)</sup>は強められたようである。その結果、あらゆる宗教——特に新宗教——は短絡的にマインドコントロールや暴力と結びつけられかねない状況が生まれた。

以上のように、オウム事件は宗教にとって一大転換期となった。そこで、このように変わりつつある現代の宗教意識を、本稿ではオウム真理教を対象に、しかもマンガという媒体を通して把握してみたい。八〇年代・九〇年代前半のマンガ文化はある程度オウムの思想に影響を及ぼしていたと言われている。『風の谷のナウシカ』や『アキラ』<sup>(20)</sup>のようなオウムに影響を及ぼした作品は、端的にいうと終末観を描写するが、ごく少数の、超能力を誇る先覚者が危機に瀕している世界を滅亡から救うというテーマも色濃く現れている。同様に、その時代の宗教・オカルトにまつわる思想を反映し、オウム自身が制作したマンガにも終末観はストーリーにはつきりとあらわれている。その映像や表現方法によって超能力の成就の魅力やオウムの救済活動を表現することに重きを置い

ており、それによって読者の興味を惹こうとした。同時に、「麻原尊師」の崇敬というモチーフが全面に現れ、完全に説法くさい伝道マンガとなっているため、この作品のエンターテインメント性はやや低い。一方、サリン事件以来、マンガ文化の中でいわゆる「カルト問題」に直接取り組む作品もある。こういったものは主に詐欺師たるカリスマの教祖、マインド・コントロール(あるいは洗脳)されている信者、社会から距離を保つ団体にこだわるが、ある作品は読者(≡世俗社会)の常識——つまり世俗主義と宗教に対する懷疑——を問うことでより複雑な表し方をする。後者を代表する浦沢直樹の『20世紀少年』というマンガは宗教に対する単純な見方を相対化する。

オウムの思想に影響を及ぼしたマンガ

筆者はオタク文化がオウムを生み出したという図式を支持しないが、こういった分析は少なくない。<sup>(22)</sup> オウムの思想は様々な宗教的伝統を部分的に寄せ集めたことによって成立したもので、その暴力性を全面的にオタク・マ